

アメリカ日記 (下)

丸 田 明 生

8. Hemingway の故郷 Oak Park

8月9日、Dorn君と暫しの別れを惜しみ Missouri州を後にグレイハウンドでシカゴに向かった。コロンビアからシカゴまでのバス代は28ドルだったが、夏の日射しもまだ柔らかい朝まだきに出発したにも拘らずシカゴに着いたのは夕方近かった。シカゴではYMCAホテルに泊った。これは比較的安あがりのホテルで若者向きだがタクシーの運転手は小生に“Be careful,”と言った。盗難に気をつけろ、というところらしかったが、十分注意していれば別に強盗がやってくることもない。部屋もそんなに我慢出来ない程でもなく、学生あたりが泊るには適したところかも知れない。ただ、フロントあたりの応待は極めて事務的である。

夕方シカゴの盛り場に出かけてみる。高架鉄道の走っているシカゴは、ガード下の街といった感じで、ニューヨークに比べてうらぶれた下町を思わせる。日も暮れてくると人通りも少くなり何となく汚なさが目につく。ネオンも気のせい妙にけばけばしく軽薄に目に映る。少し中心街をはずれると歩道に黒人の若者がたむろし別に話をするわけでもなくビルの壁に寄りかかったり道路に坐り込んだりしている。彼等には一体な

すべき事はないのだろうか、これが別に危害を加えるわけでもなさそうな彼等の前を通る時の私の感想であった。

あくる朝、今日はいよいよ Hemingway の故郷 Oak Park に足跡を印す日である。今日も又晴れ渡った空である。このような朝はシカゴも又夜とは異った顔を持っているようだ。町を職場へといそぐ人の姿にも生気が感じられる。

先程一寸触れた高架鉄道に乗り、丁度わが東京の高速道路のようにビルの間を抜け、やがて家並を見下しながら走るうち、約30~40分でオークパークに着く。あらかじめ調べておいた所在地を地図を頼りにたずねていったが、同じような通りや家が並んでいて、やはり一、二度尋ねなければならぬ羽目になった。そして道路脇の幼稚園に立寄り、若い女の先生に、“Do you happen to know the house of Ernest Hemingway's birth?” と尋ねると、彼女はにこやかにうなづいてこの遠来の客を暖く迎えるような態度でその家の見えるところまで案内してくれた。

ヘミングウェイの生家の建物は広いアベニューに面して両側にエルムの大木が立ちならぶ通りの一面に前庭に美しい芝生をかかえてやや奥まって建っている。芝生の緑が濃くあざやかだった。既に100年近くも星霜を重ねている筈なのに少しも衰えをみせていない。正面左手に円形の塔のような建物のしゃれた感じも昔の写真そのものの立派さだ。私は思い切って玄関のベルを押した。すると60才位の婦人が現われたので、この家を訪れた理由をのべると、喜んで家の内部を案内してくれた。二階はドイツ人夫婦に貸してあるということで立入ることはできなかったが、一階の居間の美しさは外観のそれに優るとも劣らぬものだった。これが日本の家だったらどうだろう。百年も変らぬそれはたしかにその建築の構造にあるに違いない。せいぜい30年が耐用年数という日本の家はおもっとうまくならないものだろうか。それはともかく、私は嘗てヘミングウェイが子供の頃家族と一緒に過した居間を又別の気持ちで眺めていたのだが、今の住人 Mrs. Renato は別に彼の作品をそれ程読んでいる様子にもみえなかった。2、3枚写真をとってからやがてこの家が手狭になっ



Hemingway が子供時代を送った居間

たということで Hemingway 一家が新しく建てて移り住んだ家に出かける。この家はたしかに彼の生家よりは大きかったが、何となし私には生家の方に親しみが持てる感じだった。Hemingwayはこの家移りの様子をその短篇“Now I Lay Me”の中で回想している。それは鋭い感受性と観察力をもった Hemingway 少年のみた彼の父母の間の微妙な考え方の違いと、彼のそれぞれの親に向ける心的態度を反映して興味深い。ここにその部分を引用してみよう。Hemingwayの父に対する深い同情と、物事を機能的に処理し、インディアンの古い矢尻などに興味をもつ父を理解しえない母への複雑な気持、その当時を思い出しながら二人のために祈る主人公の姿を思い浮かべながら読む時、ここには格別の味わいがあり、Hemingway の感受性の一端がしのばれるであろう。

I remember, after my grandfather died we moved away from that house and to a new house designed and built by my mother. Many things that were not to be moved were burned

in the back-yard and I remember those jars from the attic being thrown in the fire, and how they popped in the heat and the fire flamed up from the alcohol. I remember the snakes burning in the fire in the back-yard. But there were no people in that, only things. I could not remember who burned the things even, and I would go on until I came to people and then stop and pray for them.

About the new house I remember how my mother was always cleaning things out and making a good clearance. One time when my father was away on a hunting trip she made a good thorough cleaning out in the basement and burned everything that should not have been there. When my father came home and got down from his buggy and hitched the horse the fire was still burning in the road beside the house. I went out to meet him. He handed me his shotgun and looked at the fire. 'What's this?' he asked.

'I've been cleaning out the basement, dear,' my mother said from the porch. She was standing there smiling, to meet him. My father looked at the fire and kicked at something. Then he leaned over and picked something out of the ashes. 'Get a rake, Nick,' he said to me. I went to the basement and brought a rake and my father raked very carefully in the ashes. He raked out stone axes and stone skinning knives and tools for making arrow-heads and pieces of pottery and many arrow-heads. They had all been blackened and chipped by the fire. My father raked them all out very carefully and spread them on the grass by the road. His shotgun in its leather case and his gamebags were on the grass where he had left them when he stepped down from the buggy.

‘Take the gun and the bags in the house, Nick, and bring me a paper,’ he said. My mother had gone inside the house. I took the shotgun, which was heavy to carry and banged against my legs, and the two game-bags and started toward the house. ‘Take them one at a time,’ my father said. ‘Don’t try and carry too much at once.’ I put down the game-bags and took in the shotgun and brought out a newspaper from the pile in my father’s office. My father spread all the blackened, chipped stone implements on the paper and then wrapped them up. ‘The best arrow-heads went all to pieces,’ he said. He walked into the house with the paper package and I stayed outside on the grass with the two game-bags. After a while I took them in. In remembering that, there were only two people, so I would pray for them both.

祖父がなくなると私達は母が設計した新しい家に引越したのを思い出す。持つて行かないものは裏庭で焼かれ、屋根裏部屋から取出された例の壘がその火に投げ込まれたのを思い出す。熱で壘がわれ、アルコールから炎が立ちのぼった。裏庭の火でヘビがやけていたのを思い出す。しかしその光景の中に人はいない、ただ物だけだ。私は誰がそれを焼いたのか思い出せなかった。私は人の出てくるところまで記憶をたどってそこで止まりその人達のために祈るであろう。

その新しい家については、母がいつもきれいに磨きだててこざれいにしていた事を思い出す。ある時父が狩に行くとき母は地下室を徹底的に掃除して目ざわりなものはみんな焼いてしまった。父がもどってきて馬車から降り、馬をつないでいる時も家のそばの道端でまだ火は燃えていた。私は父を迎えに出た。父は私に散弾銃を手渡してその火を見た。「これは何だ」彼はきいた。

「地下室を掃除していたんですよ、あなた」母がポーチから言った。彼女はそこに立って笑いながら父を出迎えていた。父はその火を見て何かをけとばした。それから彼はかがんで灰の中から何かを拾いあげた。「熊手を持って来い」彼は私に言った。私は地下室へ行き、熊手を持ってくると、父は非常に注意深く灰を掻いた。彼は石の斧や、皮をはぐ石のナイフや、矢尻を作る道具や、陶器や多くの矢尻をさぐり出した。それらはみんな火のために黒ずんで欠けていた。父はそれらをみんな注意深く掻き出して道のそばの草の上に置いた。皮の

ケースに入った散弾銃と獲物を入れる袋も彼が馬車から下りた時に置いたその草の上にあった。

「鉄砲と袋を家に入れてくれ、そして紙を一枚もってきてくれ、ニック」と彼は言った。母は家の中へ入っていた。私は鉄砲を持上げた。運ぶには重すぎ脛にドシンと当たった。それと二つの袋も持って家の方へ向かおうとすると「一度に一つずつ持っていくんだよ。欲張りすぎるものぢゃない」と父は言った。私は獲物袋を置いて銃を持って家にはいり、父の部屋に積み重ねてあった新聞紙の一枚をもってきた。父はその新聞紙の上に黒くなって、壊れた石の道具を拡げ、そしてそれらを包んだ。「矢尻の一番いいのはみんなわれてしまった」と彼は言った。彼はその紙包をもって家に入り、私は二つの獲物袋の置いてある草の上はまだ立っていた。しばらくして私はそれを運び入れた。それを思い出す時、たった二人の間しか現れなかった。それで私は彼等二人のために祈るとしよう。

一筆者記

9. Gnodke 家での Home Stay

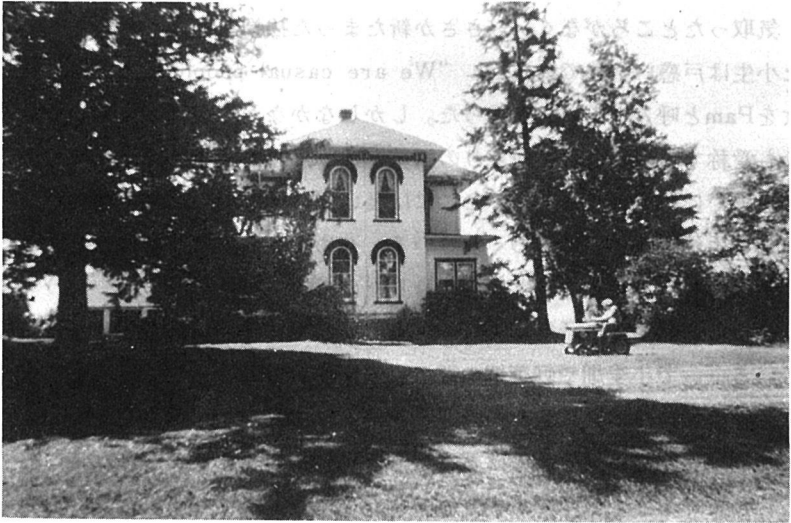
8月11日、シカゴを後にして再びミンガン州のイーストランシングにバスで帰る。これもグレイハウンドである。今は珍らしく窓の外に雨が斜線を引いている。そのせいかKalamazooという町まではうとうとしていた。2時過ぎにMSUに立寄り、種々の仕事を片付けてからKellogg Center という大学内の客を泊める施設に到着く。この建物は全く一流ホテルという感じで、ベルボーイが荷物を部屋まで運んでくれる。ニューヨークなどのホテルと異なり、食堂や部屋からの眺めがすばらしい。又来て泊まりたいなあ、と日記に書かせる雰囲気をもっている。今晚ここで王者の気分で眠ることにしよう。明日からはいよいよ初めて異国で経験するHome Stayというしろものが待っている。このHome StayもMSUのInternational Centerの紹介によるもので、大学はそういう家庭を募集し、人々はすすんでそれに応えて外国の客人を迎えるのである。私はこの大学町から車で約20分位のところにあるGnodke家に世話になることになっていた。

12日午後4時、昨夜電話で連絡をとっておいた約束通りGnodke夫人がやってきた。二人の子供連れである。5才と1才の男の子で名前をそ

れぞれJohnとDouglasといった。Gnodke 夫人は実に気さくな女性で全く取ったところがなく、いささか新たまった挨拶をしようと考えていた小生は戸惑い気味であった。“We are casual people,” と言い、彼女をPamと呼んでくれ、と言った。しかしなかなかそのfirst nameでしかも愛称で呼ぶことにはかなりの抵抗があり、遂に最後まで気楽に口に出るまでには至らなかった。ここには長い間の両国間の民族の歴史が、そして生活の歴史が壁をつくっている。せめてうしろに「さん」位をつければ気安く言葉になると思ったりしたのだが――。

彼女の運転するライトバン—— Capitol に勤める主人が乗用車を使っている——で小麦畑や野菜畑の間に点在する森の間の道を縫って家に着く。1881年に建てられたという建物だが、Hemingway の生家と同じく、まだ老いを感じさせるものはどこにもない。この家が建てられた時に植えられたであろう巨木が点在するフロントヤード、その下に大きく広がる芝生、二階建の白壁の屋敷が緑とのコントラストの中にどっしりと浮び上っている。数えきれない程の部屋は、きちんと整理されているものもあればやや雑然としたものもある。その中のバス付きの一室を与えられて旅装を解く。全体的にあまりいかめしい感じを与えない部屋のたたずまいが気持をリラックスさせる。やがて Mr. Gnodke が帰ってくる。どんな人かな、と少々不安はないわけではなかったが、Mrs. Gnodke におとらぬ気のおけない人物だったので、これからの4、5日間が楽しく過ごせそうな気がした。

8月13日。土曜日だがBill—Mr. Gnodkeのfirst name ——は一寸選挙事務があるからといって勤め先に出かける。実にいい天気なので森に向かって畑の中を散歩にあるく。Pam奥さんが案内してくれる。このあたりの畑はGnodke家のものなのだがneighbourに耕作してもらっているような。実に広い。しばらく歩いてようやく畑の中にこんもりと残るNatural Forest に着く。薪が作って並べてある。私の子供の頃見た物と積み方も全く同じだ。ただ少し大きめなだけだ。思わずなつかしさからカメラに収める。これは冬のストーブのためのものだそうだ。これは隣人



Gnodke 家と芝刈り中の Bill

のfarmerのものとのこと。ちなみにGnodke 家の暖房は全部電気なので費用はかなりかかるとPam奥さんは言う。

夕方になるとFredとAnnという友人夫婦がやってきた。Billの人柄もあると思うがこの家は友人とのつきあいが実に多かった。Annは手製のパイをもって私を含めて5人で夕食をとった。Pamさんは何時の間際に料理をしていたのか不思議だった。彼女独特のdishがテーブルの上に置かれている。そして御存知のようにそれをパスしながらめいめいの皿にとるのだ。夕暗の迫るダイニングルームでローソクのあかりで食べる食事は日本では知られないムードである。小生はここで土産の日本の酒を御披露する。羽田の免税店で買ってはるばるここまで運んできた品である。Pamさんにつけ加減を再三たずねられてOKを出したところで、みんながおもむろに口に運ぶ。とても口あたりが柔らかい、と好評だ。そしてみんなの顔にほんのりと赤味がさす。食事が終わると日本からのスライドを映写する。2時間もかかったろうか、いろいろの質問が投げ



Pam:一家の土地を散歩中のひととき

かけられる。京都や奈良などの寺や庭園も紹介する。こういう場合最も大切なことは自国についての知識である。歴史、地理、文化などあらためて外国においてその必要性を認識させられる。しかしあとでそっとPamさん曰く、「私にとって一番興味深かったのはあなたの家族と、床の間でした」と。いかにも彼女らしいその言葉が今も頭に残っている。

8月14日、日曜日。Bill一家は小生を連れてボウリングに出かけようという。あまり調子が出なかったが、アメリカでは日本と違って景気の波はあまりないらしい。昼食には例のホットドッグ。二人の男の子も喜んで食べる。子供達は食事あまり文句を言わないようだ。その点は日本の方がたしかに子供を甘やかしているのではないか、と思う。

夕方からはデトロイトに野球見物に出かける。Billの友人夫妻とBillとPam。それに私と計5人がその友人の車に乗りこんでデトロイトまで2時間あまりの道のりをとばす。車はその友人の車である。少し窮屈だが、gasを節約するためだ、とBillは言う。アメリカではずっと以前からこの限りある資源である石油を大事に使おうというキャンペーンがおこなわれていて、各自がそれは何かにつけて心掛けて心掛けているようだ。このよう

に資源の豊富なアメリカでさえそうなのに我々日本人にはその自覚がまだまだ薄いように思われるのは歎かわしいことである。

ところで夕食は車の中でとった。Billの友人の奥さんがつくっておいでくれたサンドウィッチである。運転者も実に巧みにどうにかその夕食を平らげる。ちなみにGnodke家の二人の子供は又別の友人夫妻に預けてある。このように友人間のつき合いは実に広く、又さりげない調子で行われる。お互にfirst nameで呼び合うことからこのような親密さが生まれるのかなあ、と思ったりする。野球はDetroit TigersとLos Angeles Dodgers との間でのものであった。目のさめるような球筋がいずれの場合も糸を引くように流れていたのを覚えている。ただ日本のプロ野球と違って選手の名前も知らず轟負のチームもないのでその意味ではアメリカ人がこちらに期待する程の興味は持てないのが実状であろう。しかしアメリカでも野球ファンは実に多い、というべきであろう。マンモススタンドはいつも満員のようだ。

8月15日、この日は西日本ではお盆であるが、アメリカでは何事もない。佛壇にともる燈光がふと思い出されたがそれもここアメリカの家の造りや風土には全くそぐわない。もうミシガンでは扇風機もうちわもいらぬ。日本本土の初秋といった感じである。午後は外に出て大きなoakの木の下に寝そべったり、無限に広がるトーモロコシ畑を歩いてみたりした。時折り真直ぐにのびる田舎道を自動車が通り過ぎていく。

8月16日、今日はEast Lansingに買物に出かける。日本に持帰る土産物を少々買いたいと思っていたのでPam奥さんにその話をするのと一緒につき合ってくれるとのこと。こういうことは土地の店の事情を知っている人に案内してもらうに如くはない。衣料などを中心にデパートや専門店を廻ったが、この種のものについてはやはり公平にあってアメリカの方に軍配があがる。同じ価格ではデザインと耐久性の点に於てである。それにしてもよく言われるように店員には中年の女性が多い。品物を吟味する上では年配の婦人の方が確かに信頼が置けそうである。昼食はマクドナルドの店でサンドウィッチを食べる。今日のお礼にこちらがおご

ることにする。数日間お世話になったお札にしては少なすぎる額だが、無料でhome stayを引き受けてくれたこの一家に対するせめてもの心づくしである。Pamさんはどことなく好感の持てる女性だ。口数はそれ程多くなく、程合いを心得ていて、しかも心の暖かさを感じさせる。「日本に帰っても必要なものがあたら知らせて下さい。買って送ってあげますよ」と彼女は言った。なる程home stayを申し出るにはこれ位の心がなければ——。その言葉にはしばらく忘れていた人間の心のふるさとを思い出させる響きがあった。

8月17日、水曜日。Pamさんはこの町の教育委員である。言うまでもなくアメリカでは教育委員は選挙制である。別に金持であるとも思えないし、教養を見せびらかすところもない彼女を、その人柄を認めてえらんだこの町の人々は立派だと思う。今日はこの町の小学校と高等学校へ案内してもらった。小学校へ行くと校長先生直々のお出迎えである。この校長先生の若いのには驚いた。年功序列的な我が国と違って有能な人はどんどん登用される。しかもこの校長先生を選ぶのはみんなの投票によって選ばれた教育委員会だそうである。教育委員の権限と責任もそれだけ重いわけである。

この小学校の廊下の一角に少女の像がケースに納められて置かれていた。等身大のものである。それは何かと尋ねると、嘗てこの小学校がある狂人の放火にあい、何人かの幼い生命が奪われたことがあった。この彫像はその惨事の犠牲となった子供達の霊をとむらうものである、ということだった。その時は校長夫妻も子供達を救わんとして共に炎の中で不帰の人となられたとのことである。アメリカは面白い国である。このような悪事をなす者がいるかと思えば、又彫像を設置しようという力も働く。

8月18日、木曜日。Gnodke家を去る日がきた。おだやかなミシガンの夏の朝の日射しの中で、PamさんはNikonを取り出してきて記念の撮影をする。上着を着て丁度いい位のさわやかさである。この二人の息子達と又会えるとすれば何年先のことであろうか。旅の楽しさもこういうよ

MERRY CHRISTMAS 1978

HIGHWAY DEPARTMENT MAKES A DECISION

After four years the new Alignment for US27 has been determined. It will begin at a point just south of 2480 E. Clark Road and head straight north. Right of Way Purchase is slated for late 1981. That's all we know. Still up in the air is Federal approval, since most of the funds come from Washington. At the last minute, the Environmental Review Board, the Department of Agriculture and the Department of Natural Resources for the State, opposed the new roadway, but the Commission voted 3-1 in favor.

A. B. C. DOUG

This year, Doug has gone from WALK to TALK, in a big way. On New Year's Day he just started walking, everywhere, and he hasn't stopped since. By his second birthday in October, talking, numbers, letters, small cars and trucks were the center of his world. He loves our animals and the great outdoors (the backdoor must be bolted or he'll wonder out).

ONE SHOE OFF, ONE SHOE ON

John wrapped up Kindergarten and began first grade including the usual 6th Birthday, swimming lessons, tooth fairy, shoe-tying accomplishments. His interests include sports trivia, playing baseball, and a love of maps and geography enhanced by the arrival of Rikke our exchange student/daughter from Brudager, Denmark and the around the world sail of friends. John most recently has learned to print, play slam-the-lunch box and slide on his knees.

THE GREAT DANE INTRODUCES US TO A NEW WORLD

Rikke has added so much laughter and fun to our home this year. By November, she had overcome most language problems after six years of school English, developed a craving for ice cream, keeps a regular Sunday morning racquetball game with Pam and had become an integral part of our family life, as well as High School at Bath.

MAN WORKS FROM SUN TO SUN

This year Bill reached the BIG 40. Besides participating on the County Planning Commission and Republican fundraising and coordinating the Legislative Dinner (speaker George Bush), he kept the snow out of the drive with his new tractor blade. As the diminishing number of Republicans in the Legislature (D-70; R-40) realigned, the new House Minority Leader, Bill Bryant, selected Bill as Executive Director for the coming year. If you want to pick him up on the road, try for BICYCLE BILLY on Channel 19. Election Results: November 7, 1978 -- Clinton County Commissioner -- District 10 -- William Gnodtke (R-739), C. Richard Herrold (D-656).

WOMAN'S WORK IS NEVER DONE

Life on the farm is . . . busy: endless cycles of meals and laundry. Pam had her first permanent in 16 years, achieving the frizzled look that it had taken 16 years to forget. School Board activities have included establishing an elementary school drug abuse program, answering a civil rights suit charging discrimination against Indians (the Indians lost), and participating in contract negotiations with the teachers, complete with armbands and handouts at football games and openhouses. This whole business is in a legal arena not suitable for the amateur.

THE BEST OF '78 INCLUDED:

RESTAURANTS - Ramon's (Mexican) Lansing; Oenphilia, New York City.

MOVIES - Animal House, #1; The Last Waltz, an honorable mention.

GARDEN CROP - By volume and sweetness - Corn -- with a lot of help from our neighbor.
Rookie crop - broccoli.

KITCHEN CREATION - Popovers, actually rediscovering my Dad's recipe.

TV SHOWS - Saturday Night Live and the Roots rerun.

MICHIGAN SCENE - wandering the beaches and the birch and maple trails near Good Hart along Lake Michigan at the height of raspberry season.

VISITOR - Great Grandma Dewey's week with us in July just before her 86th. All other visitors get honorable mention -- we love having company.

INFLATION ALERT - Buying a new VW Bus.

CONSERVATION ACTIVITY - Letting Chris Snow release his 13 quail on our farm, and listening for the one who hisped "Wob White."

ANTIQUES - Finally getting to the Antique Market in Ann Arbor, seeing the newly acquired Koeze-Rosenberg "Inn" near Chelsea, and refinishing the drug drawers from Bill's dad's store as a bench.

HOUSE PROJECT - Fixing up the back bedroom over the dining room for B & P in off-white and brown.

SPORTS - John's first Major League baseball game in Detroit and GO BLUE -- the Michigan Wolverines have been cheered loyally by the two family members who use the tickets.

BOOB00 - Pam locking the keys in the car before the Michigan/Michigan State game -- The beginning of the beginning of the end of a perfect day.

GAMES - Boggle

MAGAZINE - Games

We've had a great year. Our activities have ranged from learning Racquetball to the MSU Lively Arts series. We attended the GU NOOD (as in good) KEY family reunion of 125+ in July, relaxed in an East Jordan cabin with the Grasmans in June, and thrilled to a three-day holiday in New York City in November with Doug staying at Aunt Mary and Uncle Ralph's new home near Pontiac. A new black lab, Mucky (MUKILTEO, cousin of GUMP) and Trots (named by John after close observation), the black and white kitty join with all of us in wishing you a most cozy Christmas and a new year that will exceed all of your expectations.

John

Pam

Rikke

Bill (Doug)

き人との触れ合いにあるのではなからうか。

話は一年数ヶ月後のことになるが、1978年のクリスマスに私はこの一家から便りを受けとった。その中には前頁のようなこの一家の一年間のあゆみが同封されていた。このような年次記録をつくるとは又すばらしい。その中には又Denmarkからの高校生 Rikke を迎えている旨が記されている。最後の部分にみられる一家のサインの構図がえもいわれない美しさと愛を伝えている。

10. Michiganから Los Angelesへ

Billの車に同乗して Gnodke 家を後にし、ふたたび Kellogg Center に到着く。ここに二三日滞在して大学の図書館に通う予定である。アメリカの大学の図書館はキャンパス内のどの建物よりも大きく、しかも24時間開館のところが多い。夜間などは学生アルバイトによって事務が行われている。こういうところは大学当局のサービスと学生の熱意とが一体となっているのであろう。羨ましい限りである。それに勿論財政的な豊かさもある。利用者はただ黙々と真剣な表情で研究に取り組んでいる。

8月20日、土曜日。今日は珍らしく雨である。ほのかに雨にけぶる MSU と East Lansing の街を後にして Grey Hound バスでシカゴに向かう。ここではふたたび Dorn 君と二、三日行動を共にすることになっていた。彼の奥さんの Jenny さんの里がここにあるのだ。バスのターミナルには Dorn 君と彼の mother-in-law が出迎えにきていた。この婦人は50代の年令と思われたが、少しよそよそしいところがあり、彼女の家に向かう車の中でもあまり話しかけてこなかった。あとで Dorn の話るところによると彼女は夫と離婚しようとしているとのことであった。テレビのスポーツ放送を担当している主人はずっと家に帰って来ないそうである。この婦人の性格がそのようなのも多分これに原因があるに違いない。後日その主人と会う機会があったがその人は私の見る限りでは実に社会性に富む立派な人格をそなえた人物のように思えた。

それにしてもアメリカでは至るところで離婚のケースに出会う。これ

は国が富み過ぎているせいであろうか。アメリカ全土の平均で25%、カリフォルニアでは50%ということを知ったが実感ではもっと多い気がする。子供が小さい時は我慢していて彼等が結婚すれば別れるというパターンが多いのではないか。Jennyさんの両親の場合もそうである。このことについてJennyさんに感想を聞いてみると、自分はもう結婚していてDornという夫がいるのであまり気にしないが、父はやっていけるとしても母はhard timeを持つかも知れない、ということだった。両親の離婚はとても悲しい、という言葉に期待していた私だったが、これがアメリカ的でもというものかなと思ったりした。

車はミシガン湖を右手に眺めながら豪壮な邸宅の並ぶ高級住宅地の中を北に向かって進んでいた。Oxfordの町ほどのスペースはないが、いざれ劣らぬ立派な住宅が個性豊かに緑に囲まれている。前にも触れたことだが、それに比べて日本の住宅のなんとお粗末なことか。これでは西欧諸国に侮られるのももっともであろう。EC諸国は日本人は兎小屋のような家に住んでいるといい、嘗てHiroshimaを書いたJohn Hersyは、日本人の家はオモチャの家のように、と書いた。西欧諸国の家をその目で見た者は確かにその実感をいただくのだ。人口分布の適正化、平地面積の拡大、住宅政策の思い切った対策が我が国には必要であろう。

やがて車はその高級住宅の一つのアプローチに入る。しばらくすると向いに見えた車庫の扉が自然にあがっていく。そしてその中に我々は吸い込まれていた。この大きい家の中に住人がたった一人とは。週に一度お手伝さんがきて掃除をするそうだが、彼女はどんな毎日を送っているのだろうか。Dorn君にこの義母の生活についてきくと、今までの預金や株式の運用によって生活しているらしいとのことであった。

その夜知り合いだという中年の夫婦がやってきた。夫はNickleという名のコックでギリシャからの移住者だったが、アルコールが入っていたためかこちらに色々と思える質問をする。彼の妻はやや気の弱そうな女でハラハラしながらそれを聞いているが止めさせることはできないようだ。こちらは少し気分を損じていたが、他人の家の中ではある

し最後までつき合いはした。しかし考えてみるにこのアメリカ滞在を通じてやはり「教養」というものが、どの国でもどんな人種でも最も肝要な問題だと痛感したのであった。この教養というもの、それは単に教育を受けることのみによって生じるものではない。しかし教育的環境もその一つの要因になっていることは確かであろう。——いやな思いをした時などふと日本のことを思う。これがやはり母国というものだろうか。日本でいやな思いをしても他の国のことなど思いはしないであろう。不思議なものである。

8月21日、日曜日。Dorn君の車に乗ってDorn一家のreunionに出かける。reunionというのは再会という意味で、親族一同が年に一度誰かの家に集まって楽しい一日を過ごすことなのである。日本ではこういう会合は主として法事などがその役割を代替しているといえようか。それにしてもアメリカにこのような集まりがあるということは今までに聞いたことがなかった。

今年のSchuffmann一族のreunionの場所はシカゴ郊外のDorn君の叔母のLubyさんの家であった。ここはシカゴからかなり西に入ったところで、あたりが森や林や畑に囲まれた丘陵地帯にあり、隣家も彼方の林の中といった具合で、実に広々としたfront yardをもつ平家建の家だった。フリスビーという円盤のような道具を投げ合って十分に楽しめる広々とした敷地はゆるやかな起伏のためそれだけ情趣があり、まだあまり高く伸びていない庭の植木は、さんさんと降りそそぐ太陽の光を遮ぎってはいなかった。この家の主はさる科学研究所の技師で、とても物やわらかな人物だった。Dorn君の父親もNew York州のSyracuse大学の教授で嘗てはシカゴのテレビのプロデューサーであったそうである。この人ともいろいろと話がはずんだが、彼は特に西海岸で見た日本のテレビの大晦日の紅白歌合戦には大変興味を示していた。室内の調理場から運び出された料理が庭に設けられたテーブルの上に並び、そのまわりに腰かけた縁者達が一年間のつもる話に時の経つのを忘れていた。私が土産に持参した日本酒の特級もたちまち空になってしまった。Dorn君の姉夫

婦にその子供達、Luby さんの子供達や孫達、互いに写真をとり合う光景が盛りあがったこのパーティのふん囲気をよく表していた。

夕闇の迫る頃、ふたたび Dorn 君の車にのり、みんなに別れを告げると共に、特に Luby さん夫婦のもてなしに厚く謝辞をのべてシカゴにおそくもどってきた。

8月23日。Dorn君が今日夕方Jennyさんの父親に会いに行かないかという。Jennyさんも勿論一緒だ。これはJennyさんの母親のところに滞在しているこの若夫婦については言い出しにくいことかと思うのだが、不思議なことに我々の出発を‘Have a good time,’で送り出してくれた。私はその時この離婚しようとしている彼女の表情の中に一抹の淋しさを認めたように思ったのだが——。シカゴの繁華街であったJennyさんの父はさきにも書いたようにとても好感のもてる人だった。ここには日本料理店もいくつもある。そこへ行きましょうか、という彼だったが、私は外国に来たんだから、ここの名物料理をいただきます、と言ったら、彼はその言葉がとても気に入ったように童顔に更に微笑を浮べて我々をイタリア料理店に案内してくれた。名物料理といってもアメリカにはハンバーグとホットドッグ位しかないのだから。この料理店も満員に近くしかも御多分に漏れず食べ切れない程の量であった。薄暗い店内にそここのテーブルの葡萄酒の赤いグラスがムードを盛りあげていた。食事を終えて店を出た我々は、やがてどこへともなく街の中へ消えていくJennyさんの父親の車を見送りながら立っているのがであった。

8月25日、木曜日。朝列車でシカゴを発ちセントルイスに夕方着く。ここではHoliday Innに泊ることにしていた。このホテルチェーンはアメリカの各都市の効外にあり、アメリカ随一のチェーン規模を誇っていることはよく知られている。motoristのための宿である。まちなかの古いホテルに比べて規模は大きい、やはり情緒に乏しい。部屋の中のたたずまいも軽薄な感じで手をかけたものが少ない。そういえばDorn君は現在アメリカではantiqueに対するブームがおこっていると言っていた。気をつけてみるとどの町にも古道具店があちこちに目につく。古道

具店がだんだんと消えていった日本とは著しく対照的である。

8月26日、金曜日。宿をForest Parkに変える。このホテルはいわゆる古い時代からのものですべての調度が落ち着いており、従業員のサービスにも好感がもてる。滞在客もあまり多くはなさそうである。自動車乗り達は駐車場がせまく、街中にあるこういうホテルより、ハイウェー沿いの便利のいいモーテルを多く利用する。ここにも時代の推移を感じさせるものがある。近くの公園に散策に出かけたが、ここもあまりにも広く、しかも南部の入口ともいえるここセントルイスは相当に暑い。ホテルにひきかえし、ホテル内のプールで一泳ぎする。

5時頃からミシシッピー河畔に出てみる。ここはいわゆる西部開拓の基地として栄えた町で、ミシシッピー河を船でのぼってきた開拓者達が、ある者は更に河伝いに、ある者は陸路から幌馬車で西部に向かったところである。そのためここには巨大な金属性のアーチが建てられており、その弓状のアーチの内部にはエレベーターが通っている。ミシシッピー河には嘗てこの河を往来した蒸気船が幾艘も浮んでおり遊覧船として、あるものは観光用として河上レストランとなっている。そのレストランの一つで夕食をとる。魚料理に飲み物はアメリカで最高級のビールとされているドイツから輸入のHeinicken。魚料理は全部フライなので日本料理がそろそろ恋しい時期になっていたので刺身には及ばなかったが、ビールの方は仲々の味だった。このHeinickenはアメリカでは最高級とされていた。又それぞれの卓にはきまったウエイトレスが配置され、それがいづれ粒ぞろいの美人で、小生のところではどこかドイツ娘を思わせる愛嬌のある女性だった。ところが帰りのバスで変な若い男にコーヒーをさそわれ、それに応じたところ、彼はベトナム戦争で負傷したのだという。なる程足が悪いようだ。しかしいろいろ話しているうちにどうも信用できない人間のような雰囲気をもっている。そして帰りにはコーヒー代をこちらにうまいこと言って出させようとする。その上1ドル貸してくれという。明日は自分の車でこの町を案内するといったが、それは断った。アメリカにはいろいろな人間がおり、又いろいろの事が起るも

のだ。

8月27日、土曜日。一日中Southern Pacific 鉄道の中で窓の外に展開するアリゾナやニューメキシコの砂漠の景色を眺める。この沿線は不毛の砂漠地帯でそこそこに低い草木が生えている。駅のある場所には忽然として町があらわれる。こういう不毛の土地にどうして町があるのか、又そこに住んでいる人々がどうして生活しているのかという疑問が起こる。この大陸横断列車は二階建てで、一階は荷物や手洗、それに列車事務室、二階が客室となっており、実にゆったりとしたシートで、わが新幹線のそれのように能率一点張りといったところが全くない。又列車には club car という車輛があって長旅で退屈した者はここにやってくる。又列車には club car という車輛があって長旅で退屈した者はここにやってくる。そこは煙草も吸えるしビールも飲める。見知らぬ者同士がすぐに話し始めることのできる雰囲気をもっている。新幹線にもこんなものがあつたらいいなあ、と思う。

途中Grand Canyonに立寄ってみたが、この大峡谷についてはあまりにも有名なのでここでは触れないことにする。

8月31日、水曜日。朝、時間表通りにロスアンゼルスLos Angelesのunion stationに列車は到着した。夕方Southworth氏と会うことになっている。このSouthworth という人物はかれこれ20年前日本に駐留していた海兵隊 (U. S. Marine Corps) の一員で、私が高校に勤めていた頃英会話クラブに岩国からはるばる毎土曜日にゲストとしてやってきてくれていた。20年振りにこのロスの郊外Santa Ana に住んでいる彼に世話になることになったのである。

夕方までの時間潰しに日本人街Little Tokyoに行ってみることにした。日本ではむしろお目にかかれなような古い日本を紹介し、又代表する品々が店に並べられ、看板も日本語が殆んどで、日本にいるような錯覚に陥る位である。どの店も日本語が通じ、日本料理の味も日本と殆んど変わらない。なつかしい日本映画と新しい映画を上映している映画館も二軒あった。西海岸にきて日本に近くなったなあと感じたのはこれだけではない。日本人街以外のところでも日本の影響はすさまじいばかりで、

ある人は西海岸は日本の植民地になるかも知れないと冗談を言った。盆栽はかなりのブームだし、日本音楽も処々に聞かれる。ロスのいたるところに立派な日本料理店が店を開いており、しかもアメリカ人がわんさと押しかけている。夜は6時から9時半まで、チャンネルを廻せば日本のテレビを毎日やっている。その中には「花神」などという新しいドラマがある。有名なディズニーランドの夜を彩る花火も日本製である。それに畳の部屋を作ろうとしている家もかなりあるということであり、日本式の風呂を取入れたいという希望もあるらしい。

Southworth 氏の乗ってきた車も日本製だった。彼は今奥さんと離婚し、子供達も独立して一人住まいのわびしい生活を送っていた。竹内という独身の日本男性をメイド代りに雇っていた。20年前は奥さんのおのろけを聞かされたものだが——彼の身にただよう淋しさと気むづかしさは、この離婚のなせるわざかも知れないと思ったりした。

10. アメリカ西海岸

9月1日、木曜日。朝早くからディズニーランドに出かける。楽しさにかけてはこの施設の右に出るものはないであろう。一日中忙がしく廻っても全部見尽せない程盛沢山の entertainment が目白押しである。特に海賊館やHaunted House, Submarineなど印象深かった。夜になると electrical parade という電球でいろいろの形をつくった行列があり、先刻述べた花火でフィナーレが飾られた。子供連れでの海外旅行や新婚旅行には恰好の場所であろう。

9月2日、金曜日。だだっ広くひろがるロスアンゼルス街を北西に Beverly Hills に向かう。ここは有名な高級住宅地で映画の都 Hollywood と隣り合わせになっている。Faulkner が一時期ここで映画の台本を書いていたことがある。その時の模様は *A Loving Gentleman* にくわしく述べられている。この本については前に触れたが折をみつけて読み終っていた。人間にはいくつかの顔がある。Faulkner の面白さも一つはそれに由来するのかも知れぬ。かの有名な Shakespeare も表面には出さな

いが色々とエピソードのある作家であった。FaulknerがMartha Carpenterと逢瀬を楽しんだSanta Monicaの海岸は熱帯樹が茂る海沿いに公園が長くのび、西には太平洋がその名の如く静まりかえって夏の陽光を浴びている。浜辺には三々五々と海水浴を楽しむ人の姿が点在する。Beverly Hillsはその裏手の高台に拡がり有名俳優達が邸宅をかまえているところである。

9月4日、日曜日。朝Southworth氏に見送られてLos Angelesを発ち列車でOaklandに向かう。約12時間の旅で、途中の景色はアリゾナあたりに似ているところもあり又農地の拡がっているところもある。John Steinbeckの故郷のSalinasあたりは丘陵地の拡がる田園地帯であった。それにしても今年は西海岸は雨が少ないということだった。夕方8時過ぎにOaklandに着くとすぐBerkeleyのUniversity of Californiaにタクシーを走らせた。このキャンパス内のFaculty Clubに部屋をとっていたのである。しかし夜のことで、荷物をもって広いキャンパス内で、そ



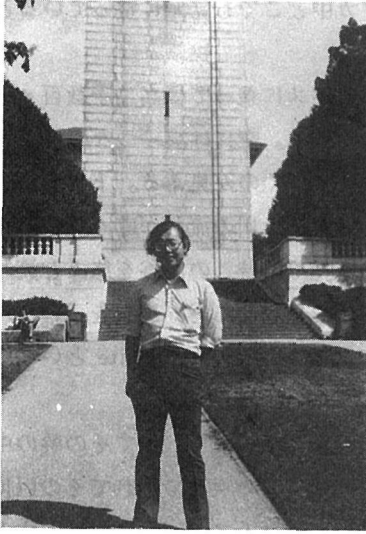
Faulknerが散歩したであろうSanta Monica

の建物をさがすには大変骨が折れた。見知らぬ土地には昼間のうちに到着すべきものである。

9月5日、月曜日。大学の英文科の研究室をたずね、主任教授に図書館の閲覧票をもらう。各研究室には必ずSecretaryがいて事務をどんどんさばいてくれる。日本の大学にもこんな制度は出来ないものかなあ、とつくづく思う。この時期はアメリカの大学は殆んど夏学期も終り講義をのぞいてみることはできないので専らこれからは図書館通いである。図書館は学部生のものと大学院生のものと二つの建物があり、やはりここでもその偉容を誇っているようだ。このUniversity of Californiaは世界中で最も多くのノーベル賞受賞者を集めているとかで、極めて意気盛んなところをみせている。キャンパス内の建物も東洋的なデザインを取入れたものもあって親近感を抱かせる。日本からの留学生も多く、この大学町では日本料理には不自由はしない。牛丼を食べさせる店など仲々の人気である。サンフランシスコもそうだが、このあたり一帯は一口にいて極めてインターナショナルである。言葉をかえていえば、東洋と西洋の文化の接点という印象をうける。Hippieの発祥地がサンフランシスコであることもうなづけるといふものだ。

9月6日、火曜日。大学のOriental Languageの研究室に青木教授を尋ねる。青木氏は小生の出身大学の先輩で、学部卒業と共にFulbright scholarship によってアメリカの大学院に五年間学び、博士号を取ってここで日本語を教えると共に、アメリカ・インディアン語の研究をしている人である。キャンパス内を案内してもらい、すしを御馳走になった。青木教授は書類に埋もれた部屋で仲々忙しそうだった。今度又言語学についての著書を日本で出版する予定だそうである。

9月10日、土曜日。サンフランシスコはさすがに秋が早い。9月の初めだというのにもう上衣はおろかコートを着ている人も見かける。聞くところによると、このシスコは夏も冬もなく一年中春か秋かの気候だそうである。余生をこの町で過すのが多くのアメリカ人の夢だそうである。公害も少なく異国情緒に富み、景色がよく、気候が温暖とくればそれも



青木教授，カリフォルニア大の
キャンパスで

当然といえるであろう。しかしここで Traveler's check を現金にするために日本の某都市銀行に立寄ったが、応待した日本女性の愛想のなさにはがっかりすると同時に少々腹が立った。同じ銀行でも日本国内とでは雲泥の差である。一般的に言ってアメリカでは銀行は事務的過ぎる。

土、日を利用して是非にと思っていたヨセミテ国立公園に出かけることにした。シエラネバタ山中に広がるこの公園はセコイアの大木で有名なところである。バスが山肌にさしかかると、ヨセミテ川の流れが右に左にと移り変わる。このあたりは日本の山合いの地形を思い出させて、ふと懐かしい気持になる。そのうちに左右の山は益々高くなると同時に、左右にそそり立つ大岩石に思わず驚嘆の叫びがあがる。ここは嘗て氷河の流れていたところで、そのために峡谷はU字型をなして、その底部は広々としてアメリカ杉や桧の大木が茂り、ところどころに meadow があり、清流が流れている。私の好みからいえば、グランドキャニオンよりもヨセミテである。荒涼として乾いた赤い肌のグランドキャニオンもたしかに珍しい風景だが、山あり谷あり樹木ありのヨセミテは、こちらを柔かく包んでくれるようだ。Yosemite Lodge という宿に泊ったが、

このような行楽地の宿泊施設はアメリカ中どこでも立派に整っていると
いえよう。

9月11日、日曜日。公園内を走る遊覧バスに乗って標高二千数百メー
トルにのぼるグレイシャーポイントにのぼる。空には雲一つなく、ジェ
ット機の残した一筋の白雲が次第に消えていくのが見える。下界を見下
せばヨセミテ村はまるで箱庭である。ヨセミテ川の流れが處々でミニア
チャーの緑の木々の合間にきらりと光る。その昔この渓谷を悠々と流れ
ていたであろう氷河を思い浮べてみる。後世になると、弓矢を手にした
インディアン達が獲物を追いかけたであろう。この Yosemite という地
名も Indian name ということだ。

午後はセユイアの樹林内を別の小型の無蓋車に乗る。嘗てその幹の中
を自動車を通り抜けていた巨木は、七、八年前の吹雪で倒れてその巨体
を横たえていたが、赤みがかった色をしたセコイアの一面の森はさすが
に壯観であった。これらの幹に立つ人間はまさに小人のようにみえる。
人のあまりいない時に一人この樹海を散歩すれば哲学の道ともなろうと
いうものであろうか。それともこの大自然に圧倒されて足早に立去りた
くなるであろうか。



ヨセミテ国立公園

おわりに

わずか3ヶ月の滞在でアメリカの印象を述べることは至難のわざである。ただアメリカが広大な空間的拡がりの中に、雑多なものが渾然と同居している国だ、という無難な言葉を吐くだけだ。そういう中で、「アメリカ的」とかというような言葉はなかなか言えるものではない。だが、それでは productive なものは生まれて来ない。アメリカを知ろうと思えば、アメリカの文学を読むことである。それはアメリカを探究した作家の尊い結晶なのである。私がおのふるさとをたずねた Hemingway と Faulkner は全く対立的ともいえる手法でこのアメリカという怪物にいどんだのであった。彼等の作品を実際のアメリカの土地に置いてみる時、その作中人物は更に水を得た魚のようにいきいきと活動し、それらの現に生きているアメリカ人とオーバーラップして、短期間の表面的ともいえる観察に肉付けさしてくれるのであった。北部の都会育ちともいえる Hemingway はアメリカ社会を鋭い刀物で切断し、その断面、即ち「部分」にするどく目を向け我々の前に提示したのに対し、Faulkner は「全体」というものの確保を目指さずにはいられない作家であったといえるようである。Faulkner は一人の年老いた独身女を描く場合にも、彼女の肩にのしかかった「女の一生」のドラマをぶどうの房のように次々と描かずにはいられなかった。このような「全体」を把握しようとする、ある意味では「不可能」への挑戦にいどんだ作家であった。又この「全体」という言葉を別の言い方をすれば「過去」の相のもとに人間をとらえることでもあった。

「私の野心はありとあらゆるものを一つの文の中に入れこむことです——現代のみでなく、現在を支配し、刻々現在に迫りつづけている過去全体も同様に——」これが Faulkner の態度であった。

Hemingway が人間一人一人のばらばらの「断片」と化した現代社会の特質を鋭くとらえているとすれば、Faulkner はそういう個人ではなく、

「家」の相のもとに人間をとらえようとしている。これは南部というものと密接な関係があるけれども、これは発展的にアメリカ全体の把握へと進んでいくものを持っているといえよう。

更にいえば、Hemingway が過去と未来を断ち切った真空の現在のみをえがき、*A Farewell to Arms* の中で死骸となった Catherine を彫像とみるような、ある意味では冷たい態度なのに対し、Faulkner には 'A Rose for Emily' や *As I Lay Dying* におけるように死体に対する異状なまでの愛着がある。これらのことはこの二人の作家がそれぞれアメリカの精神風土をあらわしているものと理解できるのではないかと思われる。私自身のことを言えば、青年時代には Hemingway に惹かれるところが強かったし、そして現在では Faulkner に惹かれるものが多い。しかしアメリカもどんどん変わりつつある。現代のユダヤ系作家の描くアメリカは又この二人の作家のそれぞれの問題点の接点にあるアメリカを浮彫りにしているようにも思われるのである。

（おわり）